

# 創立70周年記念 岐阜形象派展 2023.6/13(火)～7/23(日)

## ごあいさつ

「芸術の鳥」は人間の心の中にある。人々は、教養の如何を問わず、この鳥を胸に抱いている。芸術心がそれである。福山すすむが創立した形象派美術協会の第一展覧会は、岐阜市公会堂で開催された。1953年5月のことである。形象派岐阜支部も同時に歩み出し、今年発足70周年を迎えた。どんな時も心に「芸術の鳥」を抱きながら、ひたすら制作活動を続けてきた。

常に自分が生み出したオリジナルな色と形の不思議さに心を踊らされてきた。永い年月、悲しみにくれ、心が折れそうな時もあった。多くのメンバーが交代したが、ひとりひとりが持つ感性のはたらきを受け継いできた。抽象か具象ではなく、形象の秘密に迫るトレーニングを積み重ねている。年に一度の形象派展とデッサン大学への参加で、台湾・アメリカのアーティストや日本国内のアーティストとの交流がある。自分が描きたいように表現した作品が評価される機会である。現在8名の岐阜支部会員は、自立してさらに新しい絵画の展開を試みている。お互いが生きる力になっていることを自覚している。次の71年目に向けて、福山すすむに掲げた「芸術の鳥」をアーティストの胸の中で、更に大きく羽ばたかせて行こうとしている。



若原 徹「伸びるのびる」



白木美代子「不安の中の希望」



大西 達也「木の川」



高橋喜久枝「夏」



飯田 幸子「平和への折り」



加藤 舞子「アンモナイトの夜明け」



太田 孝子「spring has come」

## 形象派についての考え

芸術は自分の中にあり、造形活動の本質は、「形式（形）と内容（象）の一致」にある。形象はスタイルを問わない。抽象・写実・象具・非象具と自在である絵はキャンバスに向かえば描けるというものではない。描くものが見えてこなければ描けない。ではどうすれば見えてくるのか。それは人間の探求が必要である。人間がどう生きるかという哲学が必要である。「写実的なモノを描くとき、こころの中に具体的なモノがなくてはならない」

適正や素質よりも大切なものがある。「自分をたてる」という願望や努力（自立心）である。それを棚上げしなければならない。ちょっとした才能におぼれることなく、自分を立てる努力が適正を磨くことになる。

## 出品作家

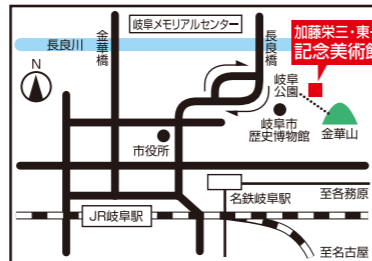
- 飯田 幸子
- 太田 孝子
- 大西 達也
- 加藤 舞子
- 白木美代子
- 高橋喜久枝
- 萩原文美子
- 若原 徹

## 岐阜市歴史博物館分館 加藤栄三・東一記念美術館

〒500-8003 岐阜市大宮町1-46(岐阜公園内) TEL・FAX058(264)6410

交通案内 JR岐阜駅または名鉄岐阜駅前から、長良橋方面行きバスで「岐阜公園歴史博物館前」で下車(所要時間約15分) 徒歩約5分(岐阜公園内・ロープウェイ駅横)

駐車場 岐阜公園北側の堤外駐車場(有料)をご利用ください。なるべく公共交通機関をご利用ください。



貴方も友の会会員になってみませんか!

## 岐阜市歴史博物館 加藤栄三・東一記念美術館 友の会 会員募集

—文化の時代 心に調いと豊かさを—

### 特典

- 会報の配布、各種催しもの案内が受けられます。
- 展覧会などの催しものが無料で何回でも観覧できます。
- 会員の引率する観覧者は団体割引料金になります。

# (公財)ぎふしん記念財団助成事業 加藤栄三・東一

# 素描の魅力

2023.4/25(火) ~ 7/23(日)



加藤 東一「達陀 (スケッチ)」



加藤 東一「白暮 (スケッチ)」

## 池袋モンパルナス回遊美術館 池袋アートギャザリング selection 2023.4/25(火)～6/11(日)



北奥美帆「馬 no.6」

## 創立70周年記念 岐阜形象派展

2023.6/13(火) ~ 7/23(日)



萩原文美子「シンフォニー」

## 岐阜市歴史博物館分館 加藤栄三・東一記念美術館

〒500-8003 岐阜市大宮町1-46(岐阜公園内) TEL・FAX058(264)6410

開館時間：午前9時～午後5時(午後4時30分までにご入館ください)

休館日：月曜日【5月1日、7月17日は開館】7月18日(火)

観覧料：高校生以上310円(団体250円) 小中学生150円(団体90円)

### 【新型コロナウイルス感染症拡大防止対策実施中】

- ※ ご入館にあたり、手指消毒、検温等にご協力ください。
- ※ 館内の混雑状況により、入場制限させていただく場合があります。ご理解・ご協力をお願いいたします。
- ※ 会期等は今後の新型コロナウイルス感染症の拡大状況等により変更・中止する場合があります。

- ※( )内は20人以上の団体料金。
- ※身体障害者手帳、精神障害者保健福祉手帳、療育手帳、難病に関する医療受給者証の交付を受けている方、及びその介助者1人、岐阜市内在住の70歳以上の方は、証明書などを提示すると無料。岐阜市内の中学生以下の方は無料。
- ※家庭の日【2023年5/21(日)、6/18(日)、7/16(日)】に入館する中学生以下の方と、その家族は無料。
- ※新型コロナウイルス感染症拡大防止対策を実施しています。ご理解、ご協力のほどよろしくお願いいたします。

## 第1展示室

# (公財)ぎふしん記念財団助成事業 2023.4/25(火) 加藤栄三・東一 素描の魅力 ~7/23(日)

平成30年より公益財団法人ぎふしん記念財団様から加藤栄三・東一作品の修復と表装に対し、多くのご支援をいただいできました。

今回、令和4年度の助成事業で館収蔵24点の下絵と素描の修復が完了しました。本展では「素描の達人」「素描の名手」と称され高い評価を受けた栄三・東一の新たに見つかったスケッチ・ドローイング・エスキスなどを初公開作品として紹介します。

この機会に、素描のもつ醍醐味を味わうとともに栄三・東一の魅力を再発見してください。



加藤 東一「離」下絵



加藤 東一「離」スケッチ

## 第2展示室

# 池袋モンパルナス回遊美術館 池袋アートギャザリングselection 2023.4/25(火)~6/11(日)

このたび、池袋とアートをつなぐ池袋モンパルナス回遊美術館事業の一環として始まった「IAG AWARDS」公募展において入選・入賞を果たしたアーティストの中から岐阜ゆかりの作家を含む10名を選抜し紹介します。

1930年代の東京池袋駅界隈には、後に日本の美術と文化に影響を与えた芸術家たちが分野や流派を超えて集い暮らした「アトリエ村」が存在しました。貧しさの中で創作活動に没頭し、夜になれば街に繰り出し交流した自由な雰囲気文化圏を詩人であった小熊秀雄はフランスのパリ南部に位置するモンパルナスにちなみ「池袋モンパルナス」と称しました。

アトリエ村から発信された芸術家たちの精神は、現在の池袋西口周辺を街歩きしながら楽しむアート空間「池袋モンパルナス回遊美術館」として今に受け継がれています。

この機会に「IAG AWARDS」アーティストたちの作品と精神を感じ取ってください。



長谷部 勇人「出品予定作品(途中)」

コロナ禍の閉鎖的な生活を送る中、蜂が集団になって巣(家)を作る行為に興味を惹かれて蜜蝋という素材に着目しました。緊急事態宣言が解除された合間には、横須賀市にある養蜂園を取材させていただき、蜂が巣箱を飛び交う様子を初めて見ることができました。蜂の数は数えられませんが、宇宙空間から無数の星を見渡す映像に似ていると思いました。そうしたたくさんさんの蜂の体内から分泌された蜜蝋をその養蜂園の方から譲っていただきました。これまでに原型の雌型に溶かした蜜蝋を流し込む方法で数体の立体造形を行いました。去年の暮れに祖母が二人とも亡くなったので、現在は女性像を形づくりながら、命の受け渡しについて考える作品を制作しています。



東 春予「0 : 00(mozunotabito/「しかたない」より)」

漫画の1コマあるいは1ページを一枚の絵画として制作する、という形態で作品を制作している。

漫画のコマはその中の時間、ある一瞬をそれそのものとして保護する装置である。仮に、紙媒体の漫画からある一コマを切り抜いて壁に貼れば、それはストーリーの構成物という位置付けから抜け出して、単なる絵、それそのものになる。過去も未来もないある一点として、そのコマの中の時間は永遠に保たれ、過去・現在・未来の時間軸から解放される。連ねられた全ての現在がそれそのものとして同列に保護される。連なりながらもストーリーにされるのを抗う瞬間、個々が個々の為だけにある瞬間、その連続として初めて成り立つ時間の経ち方を漫画の表現形式を用いて提示している。



村田 茜「Their fields」

人や静物、風景の交流を、絵画やアニメーションを通して描いています。

今回出品した絵は、昔好きだった木を描きたいと思って描きはじめた絵です。元となるモチーフは子供の時の記憶です。その木の近くで近所の子供と遊び、道をたまたに車が通ったりしました。誰にでもある風景となるように、それらを構成、抽象化して描きました。モチーフの関係、人の交流模様や車の異なる感覚、木の存在感をだすことを試みました。

木は、花を咲かせる頃はとても綺麗になりました。花が一斉に集まっている様子はとても美しいですが、一つ一つはやがて枯れ落ち死んでいくようにもみえます。圧するような、けれども脆い美しさがあらわれないかと模索しました。



田村 幸帆「気配」

大学を出ると同時に家にこもるご時世になり、自然と室内風景とイヌやネコをよく描くようになりました。

よく、描いている動物たちは飼っているのですか?とご質問をいただくのですが、私の描く動物たちに特定のモデルはいません。対象がいると、そちらに引っ張られてしまうことがあり、取って自分の中の記憶や、こうあってほしいなという形や要素を選び、なるべく普遍的になるように描くよう心がけています。よりシンプルに、要素をそぎ落としていくことで現れる純粋なイヌらしさ、ネコらしさのなかに、鑑賞する方に共感してもらえる点があるかと思えます。イマジナリーな存在だからこそ生まれる、絵ならではのリアルを感じてもらえたら嬉しいです。



石松 子明「朝顔さん」

石松子明と申します。魚座B型、法学部中退です。「不美人画」というものを描いています。不美人画とは顔面・内面共に美しくない女の子を画になるように絵にする試みで、それを筆頭に世間的にはよしとされていないあらゆるものたちにきらめきを見出すべく制作をしています。そのために大事にしているのは「性死を忘れない」と「弱さを裏切らない」ことです。画材はペン、日本画絵の具、イラストボードです。制作プロセスは、まず初めに言葉にできない感情の一つ見つけます。私もこれを表現したい、受け手に届けたいと思えるような感情を拾ったらそれを紙の上に写します。女の子なのか動物なのかカステラなのか、何を描けばその感情が伝えられるのかを模索していきます。記号としてあらゆるものを描いていって、感情が過不足なく伝わるような作品にします。受け手の心により入りやすくなるように模様や色で装飾します。それとでいたい完成です。



渡辺 佑基「10001101000101」

「玩具でもあり絵画でもある、あるいは玩具でもなく絵画でもない、なにか」

自分にとって身近なものや興味のあるものを入口として、絵画を考えることが多いです。今回の出品作品は、「遊び」を体現した玩具を出発点としました。可動性・記号性・論理性・精神性・神秘性……etc 馴染み深い玩具の数々をあらためて見つめ直すと、実に様々な可能性や造形性が秘められていることに気付かされます。心を惹きつける玩具のエッセンスを自分なりに抽出しつつ、あらためて再提示することを試みました。

遊戯とアートとの往還や振幅。そこから生まれる意味の反転、あるいはねじれや揺らぎなど。対象と絵画との距離から生成される、様々な移ろいを探りつつ。

### 協力

- 池袋モンパルナス回遊美術館 実行委員会(豊島区、立教大学、東武百貨店、NPO法人ゼファー池袋まちづくり)
- 池袋アートギャザリング事務局(一般社団法人JIAN)
- 株式会社ロイドワークスギャラリー
- ぎふアートギャザリング実行委員会



なかがわまちこ「毛器(火焔式土器)」

ごみとはりで つくる。ごみ(廃棄物、本来の役割を終えたもの)はり(針。小さな物や細い物の例え。手芸や女性の家事内仕事も連想させる。)この2つの、社会においては一見価値が無かったり弱く力なく見えるものを素材とし、新たな作品を生み出す。2011年、「古着のウール」を、ニードル(針)で刺した作品の制作を開始。廃棄物の「発泡ポリエチレン」も素材とし、平面作品、立体作品、絵本などを制作。

今回の作品は、実在する土器をモチーフとし、“毛=古着からとった羊毛”を、廃棄された発泡ポリエチレンで作った“器”に“針”で刺し、「土器」ならぬ、「毛器(けき)」とした。

縄文文化は世界に先駆けて土器を制作使用しており、質素な生活の中にも豊かな文化があった縄文時代は、地球環境が危機的な状況にあり混沌とした現代、立ち返るべき感性があると感ずる。実在する土器の紋様とともに、オリジナルの「絶滅した動物」「生き物・人々」なども紋様とし、「使い古された」素材を基に、「新たな」作品を生み出した。



平松 嵩児「出品予定作品(途中)」

自己の制作の主な観点として「自然の力による秩序や摂理」と、そこに生じる「記憶・面影」というものに注目している。この根底には、「自然界の全ての形には理由がある」という考えがある。全てのものは最後には消えてなくなってしまう。しかし、その実際の形には、これまでのさまざまな記憶と、周りに与え、周りから与えられてきた力の痕が宿っていると考えている。それは、単に終わりゆく「死」の形ではなく、長い時の流れの果てに「成った」1つの形、非常に強い力を持った「生」を司る形である。

一見すると、作品の様相は、寂しさと崩れ消えてしまいうような悲壮感があると見られることもある。しかし、そんな「生」や「死」、「有」と「無」の狭間にこそ、より強い存在性が現れると考えている。

消えゆく形を自身の手で再構築するという矛盾を伴う行為に、どんな意味が生じるのか。如何なる違いがあるのか。追い求める形とははなにか。作るという行為、素材、生じる形。様々な問いかけの中で私は作品を作っている。



高津 ゆい「ともに歩み」

・制作内容について  
動植物などの自然物を主なモチーフとし、その生命の強さと美しさを描くことを目標としています。また生き物全体としてではなく、その個体ごとのストーリーを画面内に表したいと考えています。

自然の中で暮らす生き物たちはどのように日々を生き抜いているのでしょうか。きっと個体ごとに目まぐるしく脳みそや五感を働かせているのだと思います。そんな彼らの心の内を想像し表現できるようになりたいです。

・技法について  
主な技法はアクリルガッシュとペン、水彩紙で、パステルも時々使用します。今回の作品では、最近多く用いるようになったパステルを効果的に使用しました。パステルを画面にまぶし塗り込むことで、全体に砂っぽい質感を加えたり、しっとりとした空間の奥行きを表現することができます。今までの技法に加えることで、より自分の理想の世界を描写できるようになったと思います。

まだまだ未熟で学ぶことばかりですが、本作品でも動植物の魅力を私なりに表現し、皆様にお伝えできましたら幸いです。



北奥 美帆「馬 no.6」

数年前テーマをもらってなんとなく動物のツールを本革で作ったとき、動物から剥いだ皮で動物の形のカワイイものを作っていることに、ふと人間やパイ…と思いました。家具の工場でも当たり前前に産業の素材として革(動物の体の一部)を使っている、その心持ちは“値段が高くくて縫直しのきかない材料”ぐらいで軽く消費していました。その現実にブルーになりつつ、けれど私もその産業にご飯を食べさせてもらっているし、革は家具の素材としてかなり優秀だし、革を使うことは脈々と続く文化でもあって、安直に反対するのは違うと思いながら、人間のために殺される動物に思いを馳せています。それで、今のところは殺される動物と人間のエゴを供養するつもりで、家畜や古代から人間と深い関係にあった動物をメインに制作しています。